ディベートの魅力

ディベートの現状

今でこそ、「ディベート」は世の中に認知されるようになってきました。教育界でも、普通にこの言葉を使うようになってからだいぶ経ちます。しかし、実際に指導したことがある教員は、増えているのでしょうか。もしかたら、ディベートを授業に取り入れることをやめてしまったという状況はないでしょうか。逆に、自分が小学生や中学生だったときにディベートを経験してきている若い先生方のほうが、自分の授業に取り入れようとしているのかもしれません。

低迷期にあるディベート

アクティブ・ラーニングという言葉が登場してきたときに、その具体的な学び方として、発見学習や問題解決学習、体験学習、調査学習から、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等が挙げられました。再びディベートの時代がやってくるかと期待しましたが、さほどの動きは起きなかったように思います。どうもディベートの低迷期が長いように感じています。

先生方は、大変なことは続けません。それでも、教育的な効果が認められ、いいと思ったことであれば、続けるのではないでしょうか。

一時期、教育界にディベートが広まっていったときには、ディベート的な活動、ディベートもどきが多かったのかもしれません。ディベートに対する表面的な理解やハウツー的な実践本に基づき授業に取り入れていた先生方が多いのかもしれません。この現象は、ディベート特有のものではなく、様々な指導法にも言えることです。

ディベートの価値と魅力

ディベートは、万能ではありません。特効薬でもありません。しかし、授業を変える起爆剤にはなり得ます。生徒を変える力をもっており、即効性も認められるものです。

私とディベートとの付き合いは長いものとなりました。国語の授業から始まり、道徳や総合的な学習の時間、学校行事、全校集会等でも実践を積み上げてきました。家庭科の授業担当者となったときには、家庭科の授業にも取り入れました。

改めて、ディベートの教育的な価値や魅力を確認してみます。

（１）論理的に考え、意見を発表することができる。
（２）今まで人前で話せなかった生徒が、思わず話すようになる。
（３）チーム戦のため、論理を組み立てるために協力するようになる。
（４）勝敗に関わるため、熱心に取り組み、ときには熱く話すようになる。
（５）思考力や表現力が高まり、話す力を鍛えることができる。
（６）調べる、書く、話す、聞く、話し合うなどのすべての要素が入った国語科の総合学習と言えるものである。

ディベートというと、話すイメージが先行しますが、調べる力や文章にまとめる力がないと話すことはできません。相手の話を聞いて理解する力も必要となります。総合的に、バランスよく国語力を高めることに適した学習なのです。